

府中町ふるさと歴史散策

〔第16回〕

文化財としての考古学の資料 ⑤ 弥生時代の資料

府中町の弥生時代を示す資料は、これまで紹介したように遠賀川式土器片（所在不明）と歴史民俗資料館に展示してある土器片、石鏃、有段石斧など断片的なものしかない。これらの資料からどんなことが考えられるだろうか。二千年数百年前のこの地に弥生時代の人々がやってきて稲作を営んでいたことは確かである。特に、石井城で出土した有段石斧は大陸系の石器であるため、まず最初に中国大陸から北九州へやってきた弥生文化が、稲作の東への広がりの中で、榎川の谷口か扇状地の末端縁辺の小規模な低地でイネの栽培を開始したと推定できる。水田耕作は沖積平野の広い低地の方が適していると思いがちであるが、北九州の例を見ても、最初は河川の小

さな谷底平野の低湿地でイネの栽培を始めており、広島湾頭に広がる平野（低湿地）への進出は、ずつと後のことである。下岡田遺跡の出土品に混じる少量の弥生時代の土器片と大窪谷遺跡出土の弥生時代中期の土器片から、城ヶ丘と城山との間の大窪谷の小さな低地が生産の場であった。榎川の流路は、縄文時代、弥生時代には、氾濫を繰り返したけれども現在とあまり変わっていないが、大窪谷の地形から数万年前の洪積世の時代には榎川は、「みくまり峡」の看板のあるあたりから西へ流れ、道隆寺下の道路から大窪谷へ抜けていたと考えられる。有段石斧が出た石井城第一号遺跡は扇状地の末端部付近で、扇頂は広島静養院付近にあり、石井城址のある城山と城ヶ丘

は侵食から取り残された洪積台地である。府中町では、この城ヶ丘と城山の台地とその周辺地域の丘陵地が原始・古代・中世の歴史の舞台となったが、開発と都市化の進んだ今日、古い時代の遺跡ほど消滅が著しく、弥生時代の石器と土器片の遺物は発見されているが、住居趾・集落跡・墓葬などの遺跡や遺構は全く発見されていない。お隣の中国では、石器時代から青銅器時代を経て鉄器時代へと道具の発展段階通りに進んだ。しかし、わが国では、弥生時代に青銅器と鉄器がほぼ同時に入ってきたため、青銅器時代と呼ぶ時代はない。わが国最古の青銅器は、北九州の福岡県の弥生時代前期初めの今川遺跡で発見された青銅の鑿であるが、これは、も

ともと中国の東北部の遼寧省一帯に展開している遼寧式青銅剣と呼ばれるものの一部を再加工したものである。石器時代が長く続いていたから、金属器はとても貴重なものであった。しかも遼寧式青銅剣は直接中国東北部から入ってきたものでなく、まず、朝鮮半島に伝わり、そこから日本へ入ってきたものである。北九州や山口県では、

大陸製の青銅の剣・矛・戈などの武器類と銅鏡などを死者に添えて墓に埋める例が見られるが、広島県ではそのような例がなく、北広島町（旧千代田町）の壬生西谷遺跡（土壙墓）や広島市安佐南区の毘沙門台遺跡（住居址）などから銅鏡が出土している。弥生時代の銅鐸や武器形の青銅器は大型化し、やがて実用的なものから祭祀に用いる道具へと変化していく。なかでも広島市東区福田の木ノ宗山遺跡

から銅鐸・銅剣・銅戈が一緒に出土し、弥生文化を考える上で大変重要な遺跡となっている。

府中町文化財保護審議会

会長 横田 禎昭

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272

木の宗山遺跡出土



銅鐸



銅剣



銅戈